



第 90 号
平成 23 年
5 月 発行

大震災後の 望洋荘について

社会福祉法人りんさく福祉会

理事長 須田 晃

施設長が「SEA WAVE FM いわき」のインタビューを受け、五月八日に放送された内容を全面的に掲載いたします。このインタビューから、「望洋荘」の震災後の一カ月半の様子的一端をご理解いただければ幸いです。

【アナウンサーによる冒頭のアナウンス】

いわきを一つに。前を向いて、少しずつ、今できる事を精一杯。

東日本大震災復興特別番組 【越えて行くこう明日に】

この度の東日本大震災において被災された方には心よりお見舞い申し上げます。この震災でいわき市は甚大な被害を受けました。しかし、私達は復興に向け、想像を絶する深い悲しみと困難を乗り越え、更に風評被害にも負けることなく、前に進まねばなりません。私達の明日(あした)の為に。

お年寄りや子供たちが災害弱者と言われています。そのお年寄り達が入居する施設では、今回の震災をどのように乗り越えて来たのでしょうか？

私達 FM いわきにもあちこちの施設から、食料や物資の不足を訴える声

が寄せられました。その中から、震災当時八十人を越える入居者と利用者の命を預かっていた、介護老人福祉施設「望洋荘」の取り組みについてお送りします。

合磯(かつそ)海岸を見下ろす高台にある「望洋荘」で施設長の須田美保子さんにお話を伺いました。

※アナウンサーを【ア】 施設長を【施】と表記

【ア】地震が発生した時というのはスタッフの皆さんどのように動かれたのでしょうか？

【施】スタッフと一緒に入居者の方を守るという感じで、どこかに逃げようということはまずは、無かったと思います。

【ア】まず、どうなっているかしらということ、担当の方のところのお部屋に駆けつけたと・・・

【施】部屋担当でない、というか、事務職の方達がみんな、それぞれのスタッフの所に駆けつけ、部屋の皆さんの状態の、まあ確認という事がありましたね。それだけのことで余り、騒ぎ立てる事もなく、ただ地震が凄く大きかったねという感じ・・・。入居者の皆様方は、特別な様子もなかったもので、それが一番安心した事です。

【ア】私達自身も体験したこともない様な揺れで大分パニックに陥っている人もいましたが、利用されている施設の皆さん方は、余り、パニックになることもなく。

【施】無かったです。本当に肝が据わっているというか、皆さん昔の震災や震災を乗り越えて来た方達です。で、ちよつとの事では余り動じないというか、本当に、有り難い事にパニックになる方がいらつしやらなかったという点では良かったですね。とにかく入居者の方を守らなくちゃということで、職員も余り動じなかったのは本当に幸いでした。

【ア】こういった災害の時には冷静さを保つのが一番大事だと言われますので。

【施】そうですね。

【ア】で、地震がある程度揺れが収まりました。その後なんですが、望洋荘という名前の通り、場所も平の豊間、合磯の海に面しております。そうすると、津波ということには先ず考えられましたか？

【施】津波というのは、地元の皆さんが、部落の方がここに上がって来て初めて、あ、津波だと言うことで驚きました。こちらの方には津波警報も何も聞こえませんでしたので。それに、車がどんどん上がって来るし、人も上がって来る。あ、ここは「一時避難所の指定場所」になってるんだわということで。それで、表に出てみたら、海岸線の波が引いているので、ビックリしましたね。これは大きな津波が起きているんだな—ということ。この辺の方には津波は来ないっていう、強い認識がありましたので、あ、もしかしてこれが津波なんだと思っているうちに、高台にある望洋荘から、私はまさに、凄いもの（津波）を見てしまったものですから。それはもの凄い波の引き方で、そしてあつという間に、家を全部呑み込んでしまいましたよね。これは本当に大変な事が起きていると、やっとその時に、実感しました。



震災後、通行止めになっていた豊間の県道(豊間四倉線)。道路の瓦礫は撤去されているものの周辺の津波の被害は壮絶なものです。

【ア】なるほど、一時避難所にあたっていたので、地域の皆さん方が助けを求めて、この高台にある望洋荘にも集まられたということですが、そうすると、かなり大勢の皆さんがこの望洋荘に集まった事になりますけれども、トータルで震災当日というのは、どのくらいの皆さんお集まりになったでしょうね。

【施】一時、昼間のうちは大体二百人ぐらい集まったと思うんです。でも徐々に落ち着きましてそれぞれお帰りになる方、病院に行く方とあり、ここに一晚お泊りになられた方は百五十人ぐらいいらつしやったと思いますけれども。



地震直後の正面玄関前駐車場です。津波警報が発令され、たくさんの地域の方々が高台を求めて避難されて来ました。

【ア】じゃ、職員の方、それから施設を利用している入居者の皆さん、そして避難されてきた方百五十人が一夜を。

【施】はい、そうですね、避難の方が百五十人。それに当施設の入所者が。

【ア】避難の方が百五十人。ということはそこに又、入居者の方が、そしてスタッフの方が。

【施】はい、そうです。合計二百五十人程です。

【ア】すると、まあ、被災されたのがまあ勿論地震が合った二時四十六分、当然一夜を明かすということは、その晩に、ご飯を食べようなんてことになるのでしょうか。



津波で大きな被害を受けた直後ですが、まだまだ続く余震と津波警報に不安と恐怖を抱きながら、海を眺めている避難者の方々。

【施】ですから、うちのスタッフとか入居者の方の食事はもう時間的には準備が出来上がってましたので、その晩はなんとか食べさせることは出来ましたが、避難の方、その方達のほうは私どもの備蓄というのがありますので、お水とかそういうものをお分けしたりして、それに地元のお店屋さん、差し入れて頂きまして助かりました。でも、皆さんにお腹いっぱいになるほどでは無いと思いますけれども、お菓子とか、頂いたお店の物を皆さんでお分けしました。

【ア】本当に、その当日だとなかなか食料とというのが無かったという話がありましたので、本当に有り難い心遣いだったのではな

いかと思います。先ずは、一時避難所ということですので、その後は避難されてきた方なんかも、それぞれ他のずっと滞在できそうな避難所に移られたのでしょうか。

【施】そうですね。次の日の夕方までには、皆さんそれぞれの避難所に行かれました。ただ、私どものショートステイを利用して、いる方で、ここに避難された方がいらつしやいましたので、その方は残られて家族の方からお預かりしたりしました。それでも、どうしても体調の悪い方は掛かり付けの病院の方にまでお送りしたりしました。また、避難されて来た方でも、地元の方でない方がいらしたりしていたので、その方をうちのスタッフがお宅まで送って行ったりとか、とにかく、その晩はパニックでしたね。

【ア】えー、どんどん暗くなって行きますし、その被害の現状が全て見えただけでは無いので、暗くなってきたという話をしましたけれども、こちらではライフラインは如何だったのでしょうか。

【施】殆ど、ライフライン全部が止まりましたので、あの、ロウソクですね、そう、ロウソクの灯があれ程明るいつてことを始めて体験しましたけれども。先ずは一週間ロウソクの明かりに充分お世話になりました。

【ア】ということは、一週間は電気が止まったまま。



電気・ガス・水道のライフラインが止まり、裏山から薪を拾っての炊き出し、意外と火力が強く大きな寸胴二個いっぺんに調理可能でした。



水汲みの準備、容器になる物はなんでも使いました。ほぼ毎日の水汲みは、かなりの重労働でした。

【施】はい、そうです。

【ア】で、その後は。

【施】 やつと一週間後には電気が通りましてね。電気が通りますと、暖も取れますので助かりました。それから何日だったでしょうかね、おたくのシーウエーブで私どもが、困っているというのを放送していただきまして、それで石油ストーブとか、多くの支援物資をお届け頂くようになり、皆さんには本当にお世話になりました。ご支援いただいた皆さんやボランティアの方たちの気持ちですが、こんな時だからこそ本当に有り難く感じました。多くの方が、こんな物いりますか、こんな物いりませんか、と声掛けて頂き色んな物を持って来ていただきました。水、石油、ガソリン、等々助かるものばかりでした。石油ストーブそのものが有りませんので、その時お借りしたストーブが、あそこに、玄関にも並んでいます。本当に、なんででしょうか皆さんも、自分達も大変なのに良く、色んな物、沢山持つてきてくださいました。

【ア】被災当初から、ガソリンの不足ということは言われておりましたけれども、その貴重なガソリンを使って、ここまで色んな物資を届けてくださった方が市内に沢山おいでになったということですね

【施】そうです。入居者の家族もそうですけれども、見ず知らずの方がこんな物、如何ですとか、あとはお電話で、どんな物が必要

でしようかって、伺ってから持つて行きたいと思いますとか、全国から、皆さんがいわきに入りたくても、その放射能のことがあつて、直接入れないからお送りします。とか、荷物を送りたくても業者さんがなかなか受け取ってもらえない、ということもあり、輸送関係が駄目になっていましたですものね。でも、多事多岐に亘つて皆さんから助けていただきまして、本当に何とお礼を言つていいか分かりません。



全国の善意の方々から昼夜を問わず、たくさんの方々の支援物資を届けて頂きました。食糧や物資が不足しているなか本当に有難かったです。

たけれども、これをそのスタッフだけでやり繰ることってなかなか難しかったと思うのですけど、これはどのようにされたのですか。

【施】そうですね、私ども、元気な方と具合の悪い方と分けまして、元気な方を私どもの協力診療所である須田医院の方に避難ということで引き取っていただきまして、更に具合の悪い方も引き取って頂いて、入院とさせて頂きました。その方たちの中には経皮的胃瘻、そういう方もいらっしゃる中で、お願いしました。

【ア】口から食物を採ることが出来ない。

【施】はい。その方たちも勿論避難して頂きまして、残りの方々は、殆ど介護が一律に対応出来ると判断したものですから。

【ア】あ、同じ程度の介護が必要な方。

【施】を、残しまして、少ないスタッフでやらなければならぬということがありまして、最終的にスタッフが、十四、五人が残りましてでしょうか。とにかく、このメンバーで頑張ろうということになりました。

【ア】やはり、職員でも避難をされた方々。

【施】はい、小さいお子さんがいる方とか、お年寄りがいる方とか、それぞれ家庭の事情がありますので、これは何とも言えませんが。

【ア】そういった事情でスタッフの皆さん方

も少し数が減ってしまった。かなり対応するのが大変だったかと思いますが、たとえボランティアの補充というようなことでボランティアの方々がおいになることはあったのでしょうか。

【施】そうですね、特別、介護の手伝いに入るっていうのではなくて、外部の仕事が多くありまして、お手伝いするボランティアの方々が、あちこちからお電話いただきました。その中でも、七、八人のグループですけれども、神奈川あたりが拠点のグループですが、東海大の方だと思いますが、中には救急救命士の方、看護師の方、等々多くの方が駆けつけていただきました。私どもの所でも毎日二、三人以上はお手伝いいただきまして、水汲みに行ったり、建物内外の整理など、そういう外部の仕事がありますよね、それらを手伝っていただきまして本当に有り難かったですね。

【ア】その方々は結局どのくらいの期間お手伝いでしたか。

【施】私どもで大体二週間ぐらいでしょうか。人的な支援ばかりじゃなくて、駆けつけた方達がいらっしゃる時には支援物資も持ってきていただけるんですよ。いろんな物、いただきまして、最後に、今日で終わりという時は、今でも残っているんですけど、自分たち用に持ち込んできたもので置いて

て行きまして、物品、精神的な面、人的な事、多くのお手伝いをいただいて有り難かったですね。



神奈川からボランティアでお手伝い頂きました。ユニバーサル・レスキュー・ジャパンの皆さん長い期間ありがとうございました。

【ア】（後半のナレーション）

私達FMいわきには、望洋荘をはじめ、避難所や施設の皆さんから救いを求める悲痛な連絡が次々と入って来ました。私達はその情報について、呼びかけるしか出来ないことにジレンマを感じながら放送を続けていきましたが、こうして多くのリスナーの皆さんに行動していただけた事に大きな喜びを感じています。

さて、その後の望洋荘はどのように困難を乗り越えて来たのでしょうか。まずはス

タッフの状況から、再び、施設長の須田美保子さんに伺います。



震災直後より、ガソリン不足は深刻な問題となりました。ガソリンを求めてスタンドに並ぶ車の列は数キロにもおよび、前も後ろも先が見えないほどでした。数時間並んでもガソリンが無くなり次第終了そのため給油出来ない事もしばしばでした。運良く給油出来ても2,000～3,000円の制限があり、10数リッター程度の給油であつという間に無くなってしまうため、ガソリン入荷情報をキャッチしながらスタンドに並ぶ日々でした。

【施】うちのスタッフのなかには、小さい子を東京の方に預けて戻って来るとか、お年寄りだけを別な兄弟に預けて来たとか、もう本当に、スタッフの中にはそれぞれ子供を託児所に預けに行つて戻って来るという、

そのガソリンが無い中で、スタッフも苦勞されて、本当に有り難いと思いましたが。皆さんそれぞれ、自分の仕事に専念するっていえば簡単なんですけれども、あの時期に子供を預けて、皆、何とか頑張ろうというその気持ちだけでも、とっても有り難かったですね。スタッフにも感謝してますが、何と言っても、従業員が一人になつて、一つの気持ちで、方向性を打ち出して行けたっていうのが、一番の力だったと思うのですけれども。

【ア】だって、入居されている方が居るってことは、昼間だけのお仕事ではなくって、もう二十四時間体制で臨まなくってはいけないじゃないですか。これも、大変スタッフの皆さん方のご協力を頂けたということですね。

【施】そうです。スタッフを昼の部と夜の部に分けまして、当直を四日、五日続ける人で、帰れませんので、帰えるにもガソリンが無いので。そのまま、当直、昼間は寝ていただいて、で、夜になってお仕事。昼間、仕事をした方はそのまま、当直室に泊まる。という、変則的な事も、無理にスタッフに頼みましてね。それに、若い子たちですが、心よく引き受けて、協力してくれました。通勤でも相乗りで仕事に来るって事もありまして、近くの方を拾って来ると言うこと

で、基本的には一人ではガソリンが勿体ないから乗らない。ということ、まあ、色んな知恵を出しあひまして、その時になると、それぞれのスタッフが色んな事を考えましてね、あの難を過ぎしてきたというか、今考えると夢の様ななんですけれども、...



一日二食の食事もお粥とおかず一品程度、しかも断水により、なるべく洗い物を少なくするために、お碗や皿に紙コップの代わりに紙カップをかけ、

【ア】そうですね、でも、本当に足りないのは何か、物資が足りないのはしょうがないから、それをカバーするためにはどうしたら良いだろうかという知恵を働かされた、この数ヶ月という感じだったのですか。

【施】そうですね、本当に食事が少なければ、その間に何とかしよう。お腹を空かせない為には、じゃ、どうしたらいいだろう。スタッフの中で色んな事を考えましてね...。食事を作るにも、スタッフの人数が足りない

なので、三食は無理ということで二食になりまして、で、じゃあ、昼間のおやつを二回に分けようと言ひまして、で、お昼のおやつは、今日はうどんを茹でてやろうとか、シチューを作つてやろうとか、私どもが今、目指しています「個別ケア」ということがありまして、そこでは、温かい物を、温かい時に、そのスタッフが作つて入居者様にお分けしてあげようという事なんです、そういう意味でこれは本当に個別ケアのしりだね、なんて、笑つたのですが。二階では昨日シチューだったから、今日こちらでもシチューにしようとかね、...

【ア】競い合うように。

この日のお昼は、野菜たっぷりスープのうどんを作りました。個々のユニットで、現在ある材料で、入居者様に食べ易く工夫して、ユニット内で調理しました。調理する包丁の音や立ち籠める香りもまたご馳走でした。



【施】そうですね。二階はうどんだったから、今日、うちは、何か別の物に、スープに何か入れようとか。色んな事を考えて、過ごしたという期間でしたね。

【ア】ああ、そうですか。ライフラインがままならない中、皆さんで力を合わせて、工夫して、入居されている方々のお世話をなさって来たと言うことですが、この間の何かエピソードというか、印象に残っていることがありますか。



須田医院さんに避難された入居者様、ディケア室ではリハビリ体操などを盛り込んだ介護で、入居者様いきいきとされていました。須田医院さんは食事だけでも美味しかったと話されています。

【施】そうですね。須田医院の方に避難していただいた方の中に、百歳のお誕生日を迎える方がいらっしゃいまして、いわき市としても、ご家族の方も避難されていて、市の方でもこの時期に百歳の式典をするとは困難、今回は取りやめにしますという

ことになりました、私たちで何かしてあげたいなと思ったんですよ。まあ、百歳の誕生日なんてめったに無いことなのでから。たまたま、私がお宅のラジオを聴いていまして、ケーキが出来るという放送を聴きまして、早速、そこをお願いいたしまして、ささやかですけども、支援物資にありました赤飯を、チンすれば出来るっていうのが有りますので、それを使いまして、少ない物資の中で、皆さんでちっちゃなケーキをお分けしながら、百歳の誕生日会をしたんですね。まあ、それ程たいした事ではなかったんですけど、ご本人も、「いいのよ」、なんて云いながらも喜んでいただいたのが、本当にあの中で、みんな避難した中で、明るい話でしたですね。

【ア】私も、実は新聞でそれを拝見したのですけれども、なかなか、こう心が塞ぐような事ばかりだった中で、凄く、こう、嬉しい事として記憶にあります。

【施】たまたま、百歳の誕生日会を終えて、私たちがこちらの望洋荘の方に戻りましたら、いわき民報の記者の方がお見えで、今、百歳の誕生日会をやってきたのよ、という話を話したら、じゃ、こんな時だから記事に載せていいですか、なんてことで、早速、一面に大きく載せていただきました、その後、休刊になってしまったので、良い時期に載

せていただいたなと思っています。ご家族にも、本人にも、望洋荘にとっても、とっても嬉しい話だったので、いつまでも、みんな百歳なんてめったにないことですので、まあ、ささやかながら良かったなと思います。



須田医院さんに避難されていた青木さんは3月25日に100歳の誕生日を迎えられました。震災により充分なお祝い出来ませんでしたが、心のこもった誕生日会でした。

【ア】工夫をして過ごされてきて、だんだんライフラインも徐々に戻るようになって、そして、えーと、それまで入居されていた方を須田医院さんに預かっていただいたなんてことも有りましたけれども、そういった方々が戻ってこられたというのはいつ頃になるのでしょうか。

【施】そうですね。四月の初めですね。初めの週くらいには比較的元気な方だけを、先

に戻ってきました。その後、体調の悪い方とか、胃腸の方だけを、もうちょっと待っていたいただきました。元気な方だけで、しばらく、上と下のユニット二つにして、しばらく四月二十日までは過ごしてきました。

【ア】そして、いよいよ、今は元通りの体制に？

【施】はい、今は元の五ユニットの形に戻しまして、ショートステイもぼちぼちお受け出来るようになりましたので。残りの方も戻す時にも、いろんなスタッフのことも考えまして。主任とか、生活相談員とか、やっぱり、それぞれスタッフの体制、入居の方々の生活の状況とか、体調の状況とかありますので、元々のユニットの生活にするにあたって、再度検討し直しまして、部屋の移動とか、多くの事を考え検討しました。今は大体正常な感じのユニット体制の生活ですね。

【ア】大変な時期を乗り越えて、今少しずつ落ち着きつつあるという望洋荘さんですけれども、心配だったのが、私達もリスナーの皆さんからも、どうしているかしらというお問い合わせが有ったんですけれども。本当に物資が足りなくて大変だ、という情報でしたけれども、その後、これまでの活動の中で入居されている方、お身体の方は大丈夫だったのでしょうか？



長い間断水が続き、以前の様な入浴が難しかったために、せめて足湯だけでもとスタッフが入居者様の足を丁寧に洗う様子です。

【施】私どもの入居者の中には、特別、ここに残られた方、又避難中で具合が悪くなつたということは有りませんでした。なので、無理に遠方に避難して、具合が悪くなつたりしてはと、とても心配しましたのですが、結果的には幸い、ここで頑張つて来れたのは、良かったことかなと思いました。こんな大災害の中で、こんなところで、当時は陸の孤島みたいでしたけれども、頑張つて来れたのも、市民の皆さん、多くのボランティアの方々、支援物資を送ってくれた方、本当に見ず知らずの方達のご支援があつて、私達がこうして無事に過ごしてこられたものと、本当に感謝しております。心よりお礼申し上げます。

六月の行事予定

六月二六日（日）午前一〇時より

「衣替え・家族交流会」薄磯ユニット

※なお、その時の状況により、出来る範囲でのレクリエーションを行って行きたいと思っております。

【六月のお誕生会予定】

六月一日（水）

永崎 鈴木アサイ様（九五歳）誕生会

六月二三日（木）

豊間 有田 ミイ様（九三歳）誕生会

六月二五日（土）

勿来 大橋 マキ斗様（九〇歳）誕生会

六月二六日（日）

勿来 宮崎 ミツ様（八八歳）誕生会

六月三〇日（木）

永崎 國分 桂子様（八三歳）誕生会

編集後記

『望洋荘』便り

平成二十三年五月三十一日発行

発行所 いわき市

平豊間字合磯三十九番地

社会福祉法人 りんさく福祉会

介護老人福祉施設 望洋荘

電話 (0246) 55-7373

FAX (0246) 55-7255